

産学官フォーラム～デジタルアーカイブ社会の実現に向けて～ の概要（11月14日（火）開催）

1. 概要

本フォーラムは、「知的財産推進計画2017（平成29年5月16日 知的財産戦略本部決定）」において今後取り組むべき施策とされることを受け、実施。デジタルアーカイブが社会において、日常的に活用される社会、すなわちデジタルアーカイブ社会の実現に向けて、産・学・官のそれぞれの取組や、利活用事例、デジタルアーカイブ基盤を支える技術などについて、広く一般に情報を共有するとともに、意見交換を行った。

2. フォーラム中で示された項目別の主な意見

（デジタルアーカイブ社会のイメージについて）

- 現在の検索サイトでの検索結果は玉石混淆で正しい情報を探すリテラシー能力が必要。デジタルアーカイブ社会では、正しい情報がアーカイブされて、そこに誰でも自由に簡単にアクセスできるようになるとともに、石は最初から取り除かれていて、玉（正しい情報）だけがとれるようになる社会のこと。
- 今、起きていることは、過去からの蓄積の上に成り立っていて、今、何かしようとする、それは未来の世界に影響を及ぼしていくのだという想像力を存分に羽ばたかせることをデジタルアーカイブが支える社会のこと。
- わざわざアーカイブとしてどこかに置かなくても、自然と蓄積される仕組みが実現されるのがデジタルアーカイブ社会と考える。
- デジタルアーカイブが国内外において日常的に活用され、新たなコンテンツやイノベーションを生み出すための基盤となる社会、それをデジタルアーカイブ社会とイメージする。言い換えると、日々生み出されているいろいろなデータが共有されて、それが非常に利活用されやすい条件で提示されることで、二次利用が進み、あらゆるところで新しい創造活動が行われていくような社会のこと。
- 活用者が、デジタルアーカイブで提供される情報、ひいてはこれらを提供するアーカイブ機関への自然なリスペクトを持ち、一定のルールやモラルに従って利活用することができるような社会のこと。

（オープン化の促進について）

- 国際的な IIF 対応という枠組みでコンテンツを公開することにより、世界中のデジタルアーカイブと同列に我が国から公開するコンテンツも利活用されるようになる。
- 分野横断統合ポータル構築に向けては、まず、各分野のつなぎ役の明確化のほか、具体的にジャパンサーチ（仮称）に向けての協力体制すなわち、応援団が必要と考えている。また、メタデータ・サムネイルのオープンな流通促進、オープンなデジタルコン

テンツの拡充も大変重要。

- ためている情報を全部無料で出すのは難しい。無料で保存・公開するもののデジタル化だけでビジネスをするのは酷だし、我々が今、享受しているものもそのような形で残ってきたわけではない。有料なものも含めて、きちんと整理してアーカイブしていくことが重要。
- 諸外国では、政府主導でパブリックドメインの写真等の公開を行っており、我が国でも同様の取組が求められる。

(事業の継続性、長期アクセスの保証について)

- 持続可能性のあるデジタルアーカイブ構築体制の検討が必要。ボランティアベース、不定期の寄附ベースでは不安定。基金化やクラウドファンディングの利用など、ビジネスとしても成り立つような仕組みが求められる。
- 消えていくアーカイブの救済が一つの大きな課題。他機関が維持管理できなくなったアーカイブの管理を引き受けで、機関内で利用することはできるが、これを公開するとなると、データ提供者の許可をもらわなければならない。そのような形で、公開できなくなってしまったものが結構ある。

(市民参加型デジタルアーカイブについて)

- ゲーム感覚で崩し字を学習できるアプリを配信することで、多くの人に崩し字を学習してもらい、その学習成果を活かして古文書、古典籍に記載された地震に関する情報の解読を行うプロジェクトを実施。誰でも閲覧、編集ができることにより、完璧ではないテキストを多くの人の手で編集を行い正確な情報に近づけることができる。
- 参加型デジタルアーカイブ作成環境を構築するためのソフトウェアもオープンソースで開発、公開されつつある。みんなが利活用できるデジタルアーカイブを通じて、デジタルアーカイブのエコシステムが一つ大きく前進する時期に来ている。
- 学生等が主体となって行っている地域アーカイブの構築や活用の取り組みについて、社会にとってどのような意味を持っているのかということ、知らしめてくれるような場を、国や社会が用意する必要がある。社会の中で自分たちの活動が認められたのだということを実感できるような舞台を用意し、しっかりと後押しする事によって継続的な活動に繋がっていく。

(評価指標について)

- デジタル化の成果をはかる指標として、ウェブでのアクセス数を問われることが多いが、アーカイブになったときにウェブへのアクセス数よりもそのデータがどのくらいどのように使われたかのほうが重要である。
- ウェブの直接のアクセス数しか問われない状況では、それだけを増やさなければい

けないという論理になり、ウェブサイトのデザインまで作り込まなければいけなくなる。小さな自治体で、まちの人たちにすごく愛されて、利活用が進んでいるが、ページビューが少ないアーカイブもある。1つの指標だけにこだわり過ぎずに、多様な指標を受け入れる雰囲気が必要。

(意識啓発について)

- アナログ情報を保存すれば良いと業務規定書や法律に書いてあるから現状維持で良い、という考えはサボタージュに見える。海外では、「デジタルプリザーベーション」という語が用いられ、デジタル化することと情報を保存することは不可分。日常的にデジタル情報で仕事をしていながら、アーカイブするときにアナログ情報だけ取っておくというのは意識がずれている。
- 博物館・美術館等では、いまだに来館者数が非常に重要な指標となっている。収蔵品の高精細な写真をウェブ公開すると来館者数が減るのではないかという意識がある（実際には、作品の発見可能性が高まることで、来館者数が増えることが経験則として知られている）。このような認識を大きく変えていくことが必要である。
- 平時でも災害時でも情報を共有・利活用し、認識を統一して的確に対応していくべきである。また、日頃の活動そのものを正確に記録し、アーカイブすることが次の災害時等の知になるということについて同じ状況認識を持つような社会をつくっていくことが必要。

(アーカイブ連携の対象について)

- どうアーカイブするかだけでなく、何をアーカイブするかというところが非常に重要。アーカイブしたデータの裏にはストーリーがあって、メタデータとしては書いていないが、実はそこに人間の精神が感じられるということに感動する。どのようなデータでも、それを収集した精神を裏付けるものとして重要である。
- 民間のアーカイブデータ（製品のカタログ等）を含む連携を進めるために、メタデータやプロトコルの共通化が重要。

以上